

『うつほ物語』の男宮たち

——弾正の宮と五の宮を中心に——

はじめに

『うつほ物語』において、東宮という存在は、東宮となった時点で帝位に就くことが約束されているといえるだろう。そのため、物語登場時から「東宮」として登場する人物は、順当に「今上帝」となるわけだが、その一方で、東宮の父親である朱雀帝には、東宮（一の宮）を含め、男宮だけでも十名の男子がいる。朱雀帝の、名前が確認できる男宮の数は、同様に男宮を多数持つ『源氏物語』の桐壺帝に匹敵するほどののだが、この「帝にならない」あるいは「帝になれない」宮たちは、『うつほ物語』において如何に位置づけられているのか、また、如何に「帝になる」以外の方法でその存在感を示そうとしているのだろうか。

本稿では、こうした朱雀帝の東宮以外の男宮たちのあり方について、中でも突出して登場の機会が多い上に、二人で膝枕をするよう

な様子さえ描かれる、弾正の宮（三の宮）と五の宮を中心に、様々な登場する宮たちの様子を検討し、考察する。

これまで、仲忠を中心とした琴きんの家の物語を軸に論が展開されることが多かった『うつほ物語』であるが、稿者は物語に登場する嵯峨帝、朱雀帝、そして今上帝という三人の帝のあり方を示す、「帝の物語」としての側面を持つ作品であるとも考えており、本稿ではあえて「帝にならない」宮たちの考察を進めることによって、『うつほ物語』における「帝」あるいは「おほやけ」といったもののあり方や役割をより深く追究することが出来るのではないかと考える。^②

一、朱雀帝の男宮たちと先行研究

先に述べたとおり、朱雀帝には男宮だけでも一十の宮までの子がいるのだが、まずはそれぞれをひとまず整理してみる。それが次の一覧である。

小野寺 拓也

・一の宮（東宮）後の宮腹。あて宮や嵯峨の院の小宮、梨壺らを後宮に。行政に琵琶、仲頼に笛を習い、仲忠の手本をもとに筆を学ぶ。

・二の宮 後の宮腹。行政に箏、仲忠に琵琶を習う。病弱で、「国譲下」巻で出家し西山へ。

・三の宮（彈正の宮）仁寿殿女御腹。あて宮の求婚者の一人で、独身を貫く。

・四の宮（帥の宮）仁寿殿女御腹。本文から母親を特定し辛い息子を一人持つ。

・五の宮 後の宮腹。仲忠による書物の進講に朱雀帝、東宮と彼が参加する。

・六の宮（常陸の宮）仁寿殿女御腹。源実正の大君と結婚。

・七の宮 式部卿の宮の女御腹。

・八の宮 仁寿殿女御腹。源祐澄の娘と結婚。

・九の宮 詳細不明の更衣腹。「国譲下」巻時点で童であり、花の宴に参加しない。

・十の宮 仁寿殿女御腹。女御は「嵯峨の院」巻などで懷妊中と語られていた。

以上、母親と最低限の情報を並べたのみであるが、どうやら東宮と同腹である、二の宮と五の宮は優遇されているようで、二の宮は東宮と同じように、楽器の名手たちを師として手ほどきを受けており、五の宮は物語上重要な場面であると言える、俊蔭由来の書を仲

忠が進講する場に、朱雀帝、東宮とともに参加し、さらに俊蔭の集を「いと面白」く誦む様子も描かれている（「蔵開・中」五四二）。

一方、この場面で東宮は集を誦まないのだが、これに関して武藤那賀子氏³⁾は、「誦む」という行為において、ただ一人それをしてない春宮は、一見すると皇統から外れた人物のように見える。その一方で、「ともかくものたまはで」誦んだ五の宮が、春宮を押し退けて皇統に入り込む可能性も浮上してくるのだ。ここには、次期天皇の座をめぐる人間模様が仄見えている。」というようにまとめている。東宮が「今上帝」となることは既定路線であり、皇統に入り込むとは言えないかもしれないが、病弱であった二の宮に代わり、五の宮が東宮の次に、「おはやけ」を牽引してゆく立場であったことは確かであろう。数多く存在する男宮の中でも、五の宮は独自の存在感を放っており、「国譲」三巻では異母きょうだいの女二の宮を狙うこととなる。

一方、五の宮と並ぶ、あるいはそれ以上に朱雀帝の男宮の中で登場する場面が多いのが、彈正の宮と呼ばれる、朱雀帝の三の宮である。彈正の宮は、東宮たちと違って仁寿殿女御腹であるが、「あて宮の求婚者」として、また別の存在感を発揮している。五の宮を中心にとりあげた論は管見の限り見つけられなかったが、彈正の宮については、原田芳起氏⁴⁾が、あて宮への懸想に関して、「三の宮のそれは、三の宮みずから母女御や祖母大宮と語りあうことによって、いいかえるならば自力で、諦念によって心の明るさを取りもどした。

(中略) 和歌の題に寄せて評するならば「忍ぶ恋」である。」と評している。彈正の宮の恋心は「諦念」に至り、和歌の題で言えば「忍ぶ恋」というようにまとめているが、本当に「諦念」とまで言うことができるだろうか。また、鈴木温子氏⁽⁵⁾は、史実との対応と、東宮に男御子の誕生がないことに注目して、「もし彈正の宮と正頼の娘の間に男子が産まれていたら、それこそ、菅原道真―齋世親王の場合のように、政治的に危険な立場に置かれることになる。」というように論じている。政治的な状況から、東宮と彈正の宮との対立を避けるため、彈正の宮に正頼家の娘を結ばせることが許されなかったという論であるが、それぞれ留意すべき論点を示しているものの、求婚者時代の彈正の宮に特に注目した論であり、「国譲」三巻の様子および、彈正の宮と五の宮との関係にはほとんど触れられていない。

また、ここまで紹介した名前のある宮の他にも、「親王たち」といったかたちで、名前が与えられない親王がまとめて登場する場面を確認することができるのだが、これについて、勝亦志織氏⁽⁶⁾は、「個別の存在は別として、物語内に多く描かれる宴に必要な不可欠の存在として登場している。『うつほ物語』の網羅的な記述の中において「親王」はそこにいるべき存在であり、時と場合に応じて利用されているといえよう。」とまとめている。名前のない「親王」が「親王たち」として、主に宴で酒を酌む役割を果たしていることに注目した論であるが、稿者もこれに同意する立場である。その上で、勝

亦氏は「個別の存在は別として」としているが、名前がある男宮たちも、「親王たち」と同じようにまとめて宴に登場する場面が描かれていて、例えば「国譲下」巻の嵯峨の院における花の宴には、東宮、彈正の宮、四の宮、五の宮、六の宮、八の宮たちに加え、嵯峨の院の宮三人が参加しており、「楼の上下」巻の仲忠たちの秘琴披露の場においても、さかの孫である技芸の才を持った童四人を、五の宮、六の宮、七の宮、八の宮が、それぞれ奪い合うような場面が描かれている。

ここまですでに一旦まとめてみると、朱雀帝は十名もの名前が紹介される男宮を持つものの、その活躍具合はまちまちであり、「親王たち」とひとまとめに宴で酒を酌む者たちと、存在感としてはそこまですべて変わらない者が多いようである。しかし、その中で彈正の宮と五の宮の二人は、他の兄弟に比べて登場場面が比較にならないほど多く、まさに「個別の存在」として物語に大きな影響を及ぼしている。この二人は、他の宮たちと如何なる違いがあるのだろうか。次節から、彼ら二人に注目して考察を進めてゆく。

二、彈正の宮と五の宮

朱雀帝の男宮の中で、彈正の宮と五の宮には、異母兄弟という以外共通点がある。それは、彈正の宮が母方の叔母にあたるあて宮に、五の宮が異母きょうだいである女二の宮に恋をし、そして敗れ

る、という点である。両者ともに「求婚」に破れた宮であると言うことができるが、更に言うならば、彈正の宮は東宮にとつてあて宮をめぐるライバルであった。さらに、五の宮は前節で確認したように、仲忠が書を進講する場面では、東宮以上の才覚を発揮している。また、異母きようだいであり、自らと同様皇統に連なる女二の宮を狙おうとする積極性にも、東宮を凌ぐような面がうかがえよう。

朱雀帝の男宮と言えど、そのほとんどが宴の権威付けや賑やかし以外で活躍しない状況において、彈正の宮は東宮と同じく「あて宮の求婚者」になることによって、五の宮は、東宮に対抗し得る要素を持つことで、物語において存在感を発揮していると言えよう。本稿では特に、先行論では詳しく取り扱われてこなかった、二人の宮が語り合う次の場面に注目したい。

①かくて、五の宮、彈正の宮の膝を枕にして、夜一夜、泣く泣く

物語して、「まろをば、いかにせよ、とて、この宮〔女二の宮〕

をば、まかでさせ奉り給へるぞ。かかる心あり、とて、宮〔后の宮〕も、月ごろは見給はず、上〔朱雀院〕も、よからず思したれど、それと思はず。宮〔彈正の宮〕の、我を子にして、助け給へ」などのたまひ明かして、……〔国譲・下〕八〇七

「彈正の宮の膝を枕に」、五の宮が、女二の宮を得るための協力を求める場面である。成人男性である五の宮が、同じく男性であり、しかも先に述べたような共通点を持つ彈正の宮の膝を枕にして語り合うこの場面は、どのようなものとして捉えることが出来るだろう

か。この問題意識を端緒としながら、二人の宮の様子を追っていく。先行論⁽⁷⁾でも指摘されているが、彈正の宮は「御妻^めなし」と紹介されてから、一貫して妻のいない男宮として描かれる。主にあて宮への思いを断ち切れていないことに起因しているようであるが、あて宮の入内後、彼女の筆跡を見て、母である仁寿殿の女御と次のように語っている。

②三の宮取り給ひて、「よの御手や。そこ〔仁寿殿の女御〕の御手をこそよしと、世人も思ひためれ。これ、はた、こよなかめり。かかる折ならでは、心と、え見ずなりにしはや。人にのたまはすと見ましかば、つらくもあらまし」。女御の君、「かかるならひのあるまじきことなればにこそありけめ」。宮、「さてや、小宮は東宮におはせぬ。おもとこそつらくおはすれ。まろを幸ひなく生み出で、ものを思はせ給ふ」。

〔蔵開・上〕四九三―四九四

あて宮の書を称賛する彈正の宮に対して、仁寿殿の女御は、「かかるならひのあるまじきこと」というように言う。叔母と甥との男女関係があつてはならないこと、という意味と推測されるが、彈正の宮は、同様に叔母と甥の関係である小宮と東宮の例を挙げて反論する。これに関して、『新編日本古典文学全集』では次のような頭注をつけている。⁽⁸⁾

確かに、藤壺の求婚者のなかで同腹の兄仲澄と彈正の宮は、近親ゆえに特異な存在であった。しかし、彈正の宮が反証とし

て提出した東宮と小宮の関係は問題にされることはない。ここに価値観の矛盾が存在する。(中略)近親婚の禁忌のほうが非現実的である事実と直面したゆえの矛盾であると考えられる。

当時の貴族たちの倫理観に照らし合わせると、近親婚を禁忌とするほうがむしろ矛盾であり、これを物語構成上の問題として捉えているが、ここで注目したいのは、彈正の宮が東宮を引き合いに出している、という点である。朱雀帝の女二の宮を狙う源近澄という人物も、女一の宮を妻とした仲忠の例を引き合いに、自身の行為を正当化しようとしているのだが、彈正の宮のこの発言からも、東宮に対する不平等や対抗意識を感じさせる。

この後も、彈正の宮は内心あて宮のことを諦めることはなく、「国讓中」巻では、同腹のきようだいである女一の宮に対して、次のような発言をしている。

③「彈正の宮」「かひなのことや。あまりあなづられては、過ちせられ給はむに。誰も誰も、何わざかし給はむ。幼かりければこそ、さりぬべき折ありけれど、人々の心を慎みつつ。今ならましかば、かくねたき心地せましや」。(「国讓・中」七〇六)

彈正の宮は、あて宮の求婚者であった時代を振り返り、求婚者たちが様々な手段を使ったが、自身は「幼かったので、そうした(あて宮に迫る)機会があったものの、周囲の人々の心を慮った。今であれば、あのとときのような悔しい思いはしないのに(今だったら押し入ってしまう)」というように言う。『うつほ物語』において、こ

のような表明をする人物は複数いて、「目の前の女性に手を出すか出さないか」という点で、明確に線引がされているようである。例えば仲忠や実忠といった人物は手を出さないと言い、実際にその信念に基づき行動をしているのだが、兼雅や祐澄といった人々は、むしろ積極的に手を出していくべきだ、という趣旨の発言をしている。⑩後者のグループの人物たちのうち、兼雅は「蔵開」三巻での俊蔭の娘以外の妻たちとの関係の修復に迫られ、祐澄は「国讓下」巻で女二の宮を盗み出そうとするなど、女性に関する問題が度々話題になっており、彈正の宮の本文③の発言からも、新たな事件を予感させる。

この他に、あて宮から女一の宮への手紙に、自身の思いを乗せて勝手に返事を書いてしまう、というような場面も描かれる。「国讓」三巻の彼の様子を見ると、原田氏が言うような「諦念」の域までは至っていないように思われる。⑪

彈正の宮は、結果的には最後まであて宮に対して直接手は出さなかったものの、次の場面を見ると、彼の思いが五の宮に継承されているかのように捉えることができる。

④彈正の宮の、「ここにこそ、人に憎まれて、一人のみ侍れ」。五の宮、「あな痴れや。同じ所なりけむ人を、何に慎みて。ただにはあらずぞ。わりなくとも、物をだに言ひそめつれば。人こそ、我を、いかで、と思ひたれ。いづれの男か、人を思ひかけて、それに鬱^{ふさ}じて、一人はある。……」(「国讓・下」八〇七)

右に引いたのは、①で膝枕をした後、そのまま会話をしている場面である。彈正の宮のあて宮に対する思いを知る五の宮は、彈正の宮に対して助言や協力を求めているのだが、「同じ所にいた人なのに、何に遠慮していたのか」などというように言葉を投げかける。まさに、③で確認したような女性に迫っていく態度を積極的に肯定するのが五の宮であり、叔母であるあて宮に恋をする彈正の宮の思いを、さらに過激にしたかのような人物であるとも言えよう。彈正の宮自身が反省しているようなかつての彼の態度を、五の宮は明確に否定し、乗り越えようとする。彼は実際に、「国譲下」巻では、父である朱雀帝に女二の宮の盗み出しを阻まれてなお諦めず、しつこく彼女に迫ろうとする人物なのである。彈正の宮、または五の宮について考察する際に、もう一方の存在を無視することはできない。

ここまで、彈正の宮と五の宮の共通点や関係性を探ってきたが、次節では①にあった膝枕の場面を中心に、詳しく検討してゆく。

三、「膝を枕に」するということ

前節で確認したような二人の宮の関係性を踏まえると、膝を枕に語り合う場面からは、より重要な意味が見いだされるだろう。本文の検討に入る前に、「膝を枕に」するということが、古典作品において如何なる意味を持っているのかを見てゆく。

『日本国語大辞典』を確認してみると、「ひざを枕にする」が立項

されており、「他人の膝を枕代わりにする⁽¹²⁾」という説明がつけられている。例文には『宇治拾遺物語』が挙げられているのだが、実はそれ以前に、『万葉集』で「膝まく」という語を確認することができ。それが次の歌である。

宇知日佐須 美夜能和我世波 夜麻登女乃 比射麻久其登尔 安乎
和須良須奈

うちひさす 宮の我が背は 大和女の 膝まくごとに 我を忘
らすな

現代語訳をしてみると、「(うちひさす)宮仕えに出ている私の夫よ、大和女の膝枕をするたびに、わたしのことを思い出してください。」というようになるだろうか。この「膝まく」という語からは男女の性愛関係を汲み取ることができるが、平安時代の物語作品には見つけることができなかった。

さらに、「膝を枕に」するという例自体、管見の限り『うつほ物語』以外では平安時代中期までの文学作品では見つけることができず、『うつほ物語』以降の作品となると、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』を待つことになる。次に引くのは、『今昔物語集』の巻二、「神名睿実持経者語第三十五」の一部である。

三位ノ中将殿ノ臥給ヘル頸ニ聖人ノ手ヲ入レ給、膝ニ枕ヲセ
サセテ、寿量品ヲ打出シテ読ム音、世ニハ然ハカク尊キ人モ
有ケリト思□。

三位中将公季が重い病氣となり、評判高い持経者である睿実のもと

に行くという場面であるが、ここでは、睿実が膝を枕にさせている。公季は首に手も入れさせており、自身の命運を委託するような姿勢であると言えよう。「膝まく」は男女関係が想起されるような場面で用いられていたが、こちらの膝枕は、信頼関係のようなものを捉えることができる。

『うつほ物語』に戻って考えてみると、膝を枕にしている例は、彈正の宮と五の宮の今回取り上げた場面以外には見いだされなかった。この他の例となると、膝枕の例とは異なるが、子供を膝に据えるという場面を十一例見つけることができる。次に引くのは、仲忠が娘のいぬ宮を膝の上にのせてかわいがっている場面である。

⑤〔典侍〕「……おとどの君は、とみのことあれど、率て遊ばせ給ひつつ、放ち給はず。夜昼、膝にぞ据ゑ奉り給へる。げに、いとうつくしきや」

〔国譲・中〕六九五―六九六

この他の例も確認してみたところ、「膝に据ゑ」るのは大人が子供に対してする例のみであった。

日本の古典作品では限られた例しか見つけることができなかった一方で、漢籍の方に目を向けてみると、『史記』や『三国志』といった作品で、男性同士の膝枕の例を確認することができた。例えば、『史記』には、「王因枕其股而臥。鉤人又以土自代逃去。王覺而弗見、遂飢、弗能起。」（巻四〇 楚世家第十）という一節が見いだせる。弟の反逆により追われるものとなった靈王が、かつて自身のもとで働いていた鉤人の「股を枕に」眠ってしまった、処罰を恐れ

た鉤人が代わりに土枕を作って逃げるというエピソードであるが、結果的には逃げられてしまったものの、王が鉤人の股（実際にはいわゆる膝枕と同じく太ものあたりであろう）を枕に眠るという行為からは、全幅の信頼を見て取ることができる。『うつほ物語』に漢籍由来の要素が様々影響していることは、各注釈書でも多く言及されているが、男性同士で膝枕をするという要素も、例の一つとして数えられるかもしれない。

ここまでの例を踏まえながら、改めて①の場面を見てみると、次の傍線部に留意される。

①（再掲）かくて、五の宮、彈正の宮の膝を枕にして、夜一夜、泣く泣く物語して、「まろをば、いかにせよ、とて、この宮（女二の宮）をば、まかでさせ奉り給へるぞ。かかる心あり、とて、宮（後の宮）も、月ごろは見給はず、上（朱雀院）も、よからず思したれど、それも思はず。宮（彈正の宮）の、我を子にして、助け給へ」などのたまひ明かして、……

〔国譲・下〕八〇七）

五の宮が、彈正の宮に対して、「私を子にしてお助けください」というような趣旨の発言をしているのである。上代に用いられた「膝まく」という言葉からは、性愛関係が想起され得るが、これを、意味合いは違うが「膝に据える」というところまで目を向け、また漢籍の例も含めて膝枕という行為を検討してみると、強い信頼関係や、擬似的な親子関係を汲み取ることができよう。母違いの兄である彈

正の宮の膝を枕にする五の宮の様子からは、どこか親子のような雰
囲気を見ることができ、まさに「我を子にして、助け給へ」という
言葉と対応している。

膝枕という行為を通じて、擬似的な親子関係を結ぶ弾正の宮と五
の宮であるが、実は『うつほ物語』では、彼らの他に、親子の關係
を結ぼうとする人々を複数確認する事ができる。それが次に引く二
組の例である。

⑥君〔藤壺〕、「いでや、いみじく恥ぢ隠し給ひしを、人に聞こゆる
と、亡き影にてもこそ見給へ」〔祐澄〕「祐澄をば、あまたあれ
ども、そが中に親子の契りなしたりしかば、さもおはせじ」。

〔藏開・上〕五一四

⑦〔実頼〕「実頼は、殿隠れ給ひて後、夜昼、悲しきことを思ひ給
へ嘆きつるに、今日なむ、その心も忘れて、うれしう思ひ給ふ
る。なほ、かくて経給はば、すべて、同じきはらからと聞こゆ
とも、親、君と仕うまつらむ」とて、二所ながらここにものし
給ひ、かしづき仕うまつり給ひつつ、……」

〔国譲・中〕七三〇

⑥では、同腹のあて宮に恋をし、亡くなった仲澄と、仲澄の兄にあ
たる祐澄が「親子の契り」なる關係を結んでいたことが明かされて
いる。仲澄は事実上、正頼家での一番の出世頭であったのだが、彼
が亡くなった後は、この契りを結んでいたという祐澄が、仲澄の役
目も担うこととなる。

また、⑦の方でも、季明の息子である実頼が、弟の実忠に対して、
「親や君主と（思つて）仕えましよう」というような発言をしている。
実際にこのあと、長男の実正と、次男の実頼、そしてあて宮たちの
尽力によって、三男の実忠が政界に復帰してゆくことになる。

⑥、⑦の例で共通して言えることは、いずれも実の兄弟が、親と
子という關係を結ぶことによって、より強固な繋がりを築いてゆく、
という点であるが、仮に、朱雀帝の息子である二人も、擬似的な親
子としての關係を結ぶことになるかすれば、それにより結束を強め、
女二の宮に狙いをすませることになると言える。すでに立坊争いは
ほとんど決着がついてしまっているが、五の宮が女二の宮と結ばれ、
この二人の間に息子が生まれた場合、「おほやけ」の血を色濃く受
け継いだ、きわめて高貴な男子が東宮の子世代の中に位置すること
となる。宴の添え物以上の活躍の場面がない男宮たちと異なり、五
の宮は、東宮に匹敵するとまではまだ言えないものの、東宮に対抗
する可能性を持つことによって、物語の要所で存在感を示している
のである。

結果的に女二の宮の盗み出しは仲忠、朱雀帝、そして女一の宮に
よって阻止されるのであるが、この二人の結びつきは、東宮側の人
間からすると無視することはできない。次の節では、女二の宮を狙
うこと以外にも、具体的に東宮や仲忠たちの障壁となる、二人の様
子を追ってゆく。

四、二人の宮のあがき

ここまで、東宮に対抗することで存在感を示した二人の宮と、その結びつきを中心に見てきたが、先に上げた共通点以外にも、この二人には、東宮、および仲忠に関わる重要な秘密を暴露する、という共通点を見出すことができる。次に引くのは、彈正の宮が、仲忠と女一の宮がいる目の前で、仁寿殿の女御にかつての仲忠の恋を語る場面である、

⑧〔彈正の宮〕「多くも聞こし召し残したりけるかな。いといみじきことども、多く侍りしものを。まづは、かしこぞ」。とて、中納言〔仲忠〕を見やり給ひて、「ここにこそ、同じ所にて、よくは知り給へらめ。しかのたとひなることもや、思し合はすることとも侍らむかし」とのたまへば、宮〔女一の宮〕、をかしと思す。

中納言、苦しと思す。

〔藏開・上〕五二二

「おほやけ」に連なる女性を娶り、後には娘のいぬ宮の入内をも予感させる仲忠であるが、彼のあて宮に対する思いを、彈正の宮は暴露する。これと同じように、五の宮の方も、重要な秘密をあらわにしてしまうのである。

⑨上〔朱雀帝〕、「いづくにもせらるるにかあらむ」。〔五の宮〕「藤壺ならでは、いづくにかは。異人を知り給はばこそあらめ」。「皇女を、いかにし奉らるむ」。宮、「それは、今年、いまだ対面し

給はざなり。すべて、誰も、見奉ること難し。いかならむ暇にか侍りつらむ、この御妹〔梨壺〕こそ、時々見奉りて、妊じて侍るなり」。

〔藏開・中〕五三九

五の宮が、東宮のあて宮偏愛や、梨壺の懷妊を朱雀帝に告げている。東宮に対する周囲の不信感を強め、また梨壺の懷妊というのちの立坊争いの要因をいち早く明らかにするのが、五の宮なのである。

結局、立坊争いは藤壺方の勝利となり、女二の宮を盗み出すことにも失敗することになるのだが、独身を貫き、正頼家の一員となれなかった彈正の宮と、東宮に次ぐ二番手という役目を放棄し、盗みによって女二の宮を得ようとした五の宮からは、正頼流の権威と、東宮の権威、何れにも与さない、というような姿勢を見出すことができる。彼の秘密の暴露からは、正頼や東宮、そして彼らと非常に強く結びつく仲忠によって、安定にむかってゆく世界を、かき乱してやろうという気概、あるいはあがきのようなものすら感じられるのである。

さらに、五の宮の他に、女二の宮を盗み出そうとした祐澄、近澄といった人物は、盗みに失敗すると身を潜めてしまうのだが、五の宮は二度盗み出そうとし、失敗してもなお、物語に登場し続ける。『うつほ物語』において最後に五の宮が登場するのが、次の場面である。

⑩四人ながら、いとをかしう、吹かぬ笛なく吹き立てて、まだ小さきも、顔かたち、愛敬あいぎやうをかしげにて、かかる才をいとうつく

しくすれば、院〔朱雀〕の宮たち、我も我も、と得むとし給へば、
……
〔楼の上・下〕九二四―九二五

かつて仲忠の母である俊蔭の娘の世話をした、さがのという人物の孫を、朱雀院の宮たちが得ようとしている。さがのの孫たち四人は、それぞれ技芸の才能に秀でていて、東宮が仲忠をはじめとした才覚あふれる男君達を重用し、自身も仲忠の書を学ぶなどして成長を遂げたのと同じように、さがのの孫たちは、さらに次の世代の男君として、五の宮たち朱雀院の宮、および彼らの子との関係を結ぶ可能性が残されるのである。

まとめ

以上、弾正の宮と五の宮を中心に、朱雀帝の男宮たちについて論じてきた。朱雀帝には名前が確認できるだけでも十名の男子がいたわけだが、そのほとんどが、「親王たち」と名無しで宴の賑やかに登場する者たちと同程度に位置づけられていた。

しかしその一方で、後に帝となる東宮以外では、弾正の宮と五の宮が抜さん出て登場していた。彼ら二人のうち、特に五の宮は、東宮に対抗しうる可能性を持つことによって、「おほやけ」の権威とも正頼の権威ともまた異なる方法で、存在感を示そうとしていたのである。この二人を比較してみると、弾正の宮より五の宮のほうが、血縁的に近い人物に恋をしていたり、実際に盗みの計画を立てたり

と、より過激な人物として描かれていた。同腹のきょうだいに恋をした仲澄と比較しても、五の宮はよりしたたかで、また具体的な行動を何度も起こそうとし、しかも自死などには全く至ろうとしない、という相違点がある。

帝以外の「おほやけ」の権威が、正頼に代表される摂関政治的な権威の前にもうまく発揮されない中、弾正の宮の意志を継承した五の宮は、東宮および仲忠による世界をかき乱し、独自の方法で、その権威を伸長しようとしていたと言えるのではないだろうか。女二の宮を一度は諦めた五の宮であるが、仲忠たちより更に次の世代の、才覚を持った男君となり得る童たちを得ようとしている点は興味深い。作品内ではこれ以上語られることがないものの、東宮や仲忠一家の秘密を暴露し得る人物であり、そして弾正の宮以上の不穏分子として存在し続ける五の宮は、不気味に存在感を放ち続ける。

「おほやけ」や正頼一族、そして琴をはじめとした技芸の才能と、様々な権威や力が浮き沈みし、そのバランスが度々入れ替わる『うつほ物語』において、男君たちは、婚姻以外にも、友人関係や擬似的な親子関係など、様々なつながりによって、存在感を示そうとする。ともすれば宴の添え物となってしまう男宮たちもまた同様であり、弾正の宮と五の宮の「膝枕」からは、その方法の一端を見て取ることができるのである。

※『うつほ物語』の引用本文は、室城秀之『うつほ物語全 改訂版』（おう

ふう、二〇〇一）に拠り、一部表記を改めた。また、『うつほ物語』以外の日本古典文学作品の引用は、『新編日本古典文学全集』に拠り、『史記』の引用は『新釈漢文大系』に拠るが、旧字を新字に改めている。

注

- (1) 『源氏物語』の「橋姫」巻では、（実際には源氏の子ではあるが）冷泉院が「十のみこ」とされている。
- (2) 「おはやけ」の権威に関して、三代の帝を正面からとりあげる論考も、現在執筆中である。
- (3) 武藤那賀子「清原家の家集進講」（『うつほ物語論 物語文学と「書く」と」笠間書院、二〇一七）
- (4) 原田芳起「彈正の宮の恋——物語構想の進展——」（『宇津保物語研究考説編』風間書房、一九九七 ※初出は一九七九・一一）
- (5) 鈴木温子「齊世親王と『うつほ物語』の彈正の宮・春宮の異母兄弟・三の宮・「御妻なし」を視座とした人物造型」（『駒澤国文』四六、駒澤大学文学部国文学研究室、二〇〇九・二）
- (6) 勝亦志織「親王・皇女」（学習院大学平安文学研究会編『うつほ物語大事典』（勉誠出版、二〇一四）
- (7) 注(5)の鈴木論文。
- (8) 中野幸一校注・訳『新編日本古典文学全集 うつほ物語』②（小学館、二〇〇一）三七五頁
- (9) 近澄は、正頼から女二の宮を狙っていることを咎められて、「さて、仲忠侍らずや」と返したが、「それは、不意に賜へばこそあれ。きんちは、いかなる道、何によりて」（『蔵開・下』六〇〇）と諫められた。
- (10) 例えば兼雅は、仲忠に対して、「……まかでてもものせられむ時、空酔ひをして、ただ入りに入るべきぞかし。人も騒がば、いたく酔ひにけりや。ここはいづくぞ。中のおとどにはあらずや、と、ただ酔ひに酔ふばかりぞかし」（『蔵開・中』五七〇）というように、仲忠と、さらに妻である俊蔭

の娘の前で、「酔つ払ったふりをして、女性のもとに押し入ってしまったのが良い」などというようにアドバイスをし、この後二人に諫められている。

(11) 注(4)の原田論文。

(12) 『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇〇～二〇〇二）

- (13) 女二の宮を盗み出そうとする男たちに関しては、拙稿『うつほ物語』の「盗まれない」女二の宮をめぐる——「挿話」に示される人々の関係性——」（『国文学研究』一九二、早稲田大学国文学会、二〇二〇・一〇）で詳しく検討している。